

## 6. 子宮の腫瘍（腺癌、子宮蓄膿症等）

雌のウサギで、避妊手術を受けてないと、流産や未熟児、難産など症状の他、子宮内膜炎、子宮蓄膿症、また子宮の癌等いろいろな子宮の病気が発症することがあります。子宮の病気が進行すると、以下の症状が出ることがあります。

### 腺癌（adenocarcinoma）

- 1) 食欲不振、元気消失、落ち込み、無気力になり、
- 2) 体重が減少し始めます。
- 3) 血尿が出たり、血の混じった膣分泌物が出たりすることもあります。
- 4) 進行すると、肺に二次的な腫瘍が発生し、呼吸障害（呼吸困難）となります。

ウサギの子宮癌には、どんなタイプがありますか？主な癌は以下の通りです。

- 1) 腺腫（Adenoma）：通常、腺組織から発生する。
- 2) 癌（Carcinoma）皮膚や内臓を覆う組織から発生する。
- 3) 肉腫（Sarcoma）骨、軟骨、脂肪、筋肉、血管、その他の結合組織や支持組織に発生。
- 4) 白血病（Leukaemia）骨髄などの造血組織で発症し、異常な血液細胞が血流に入る。
- 5) リンパ腫および骨髄腫（Lymphoma and myeloma）免疫系の細胞（白血球）です。
- 6) 中枢神経系の癌（Central nervous system cancers）：脳や脊髄の組織で始まります。

### どんな種類のウサギが掛かりやすいのですか？

ダッチ、ドワーフロップ、イングリッシュ、ネザーランドドワーフ、タン、フレンチシルバー、ハバナ、ポーリッシュなど、いくつかの品種で発症しやすいよう。しかしどの品種のウサギでも発症する可能性があります。過去に産んだことのあるウサギが発症しにくいという証拠はありません。通常、腫瘍はゆっくりと成長するため、病気が進行するまで飼い主が異常に気づかないこともあり、1～2年かけて進行することもあります。

ウサギの種類による、起こり易いウサギは、3歳以下で4%以上、5歳以上で50%以上の報告があります。

### 乳腺腫瘍と腺癌

これらの腫瘍もまた、去勢していない成体の雌ウサギによく見られます。症状は良性および悪性の乳腺腫瘍と似ています。ウサギの乳首が大きくなる？分泌物のある？か調べてください。この病気を示唆しているかもしれません。これらの腫瘍は通常痛みを伴いませんが、二次感染や潰瘍化が時々見られます。

まれに精巣腫瘍も認められます。片方または両方の睾丸の肥大を伴うことがあります。腫れた睾丸は通常、痛みを伴いません。これらの腫瘍が他の臓器、特に肺に二次転移する可能性があり、その場合は呼吸障害が明らかになります。

#### ウサギの子宮癌は、どのようにして診断しますか？

- 1) 雌のウサギで血尿が出たり、血の混じった膣分泌物が出たりする。
- 2) 子宮を触ると、何となく固い？しこりがある場合。
- 3) X線検査や腹部の超音波検査で、子宮の腫瘤を見つけること。

#### ウサギと血尿について

ウサギの尿の色調について、オレンジ尿？は時々認められるが、一般的には濃い黄色から濃い赤色に着色された尿です。これは、食物に含まれる植物性色素や脱水、その他の環境要因によって生じます。多くの場合、これは植物性の色素（カロチン）のためで、食事との関係を良く調べます。食餌中の植物性色素がなくなったために深紅色になっただけの普通のうさぎの尿です。

血の混じった色の尿の症状は尿の色が濃い黄色からオレンジ、赤や茶色の色合いになります。濃い色の尿に強烈な臭いが伴う場合は、熱ストレスや脱水症状の可能性があり、また血の混じった色の尿の原因としてはキャベツ、タンポポ、ブロッコリー、ニンジンやハウレンソウのようなβカロチンを多く含む食品、モミの葉などの植物性色素を摂取することによって起こる他には、暑さによる疲労、脱水症状、抗生物質、最初の寒い日などの環境変化によっても起こることがあります。

本当に血尿が出る場合は、尿路内の結石や汚泥、膀胱炎、子宮腺癌、ポリープ、流産、雄の精巣癌や外傷などが原因であることが多い。特に重要なのは、膀胱炎と子宮腺癌の血尿かを鑑別する必要があります。この基本は何処から血尿が来るかによります。膀胱炎は膀胱からの出血で、子宮の癌は、膣からの出血です。

#### ウサギの子宮癌はどのようにして治療しますか？

初期であれば、ほとんどの種類の癌は手術で治療できます。この病気は完全に予防することができます。雌のウサギには卵巣摘出術、雄には去勢手術です。また、すでに腫瘍がある場合には、肺に既に転移してなければ、手術ができます。

肺等に転移している場合には、この種の腫瘍に適切な化学療法が報告されていないため、予後は非常に悪く、このような状況では、ウサギにとって苦しくならないように、最後の手段すなわち安楽死も選択肢になります。

乳腺癌や腺癌の場合は、乳房の部分切除や完全切除（手術で乳腺組織をすべて切除すること）や避妊手術が選択されます。良性腫瘍は治療を必要としない場合もありますが、大きくなる可能性があるため、しばしば切除されます。腫瘍が骨髄、肺、リンパ節に転移している場合は、予後が非常に悪く、外科手術を行っても病気は治りません。

去勢手術は精巣新生物の治療法として選択されますが、肺への転移がなければ、これで病気は治ります。他の原発性腫瘍と同様に、肺への転移がある場合は、治療が無駄になることが多く、安楽死を考慮します。この病気を予防するために、繁殖しない雄のウサギはすべて去勢することをお勧めします。

ウサギで報告されているその他の腫瘍の種類は以下の通りです。

**乳頭腫 (Papilloma)**・・・カリフラワーのように見える良性の成長で、時々出血することがあります。口の中にできた乳頭腫は非癌性と考えられています。

**基底細胞癌 (Basal cell carcinoma)**・・・皮膚癌の一種で、良性または悪性の可能性があり、赤くなった皮膚のように見えます。成長が遅く、時間をかけて発生することが多い。局所的に広がることはあっても、転移して体の他の部位に広がることはほとんどありません。

**骨肉腫 (Osteosarcoma)**・・・骨に発生する腫瘍で、ウサギでは珍しいとされています。臨床症状としては、跛行や脚の硬い腫れなどがあります。

**リンパ腫 (Lymphoma)**・・・リンパ系の癌です。

**肺腫 (Tymoma)**・・・これらの腫瘍はウサギではあまり見られません。唯一の臨床症状は、眼球の球体からの突出かもしれません。このような症例は、眼球が二次的に関与しているにもかかわらず、一次的な原因が他にあるかもしれないため、通常は複雑です。実際、胸腺腫が胸部でゆっくりと成長し、頭部に血液を送る血管を圧迫して、この特別な臨床症状を引き起こしているのかもしれません。

うさぎに見られる癌のほとんどは、生殖器系に影響を及ぼすものなので、若いうちに去勢手術を受けることが、最も一般的な癌をなくす鍵となります。

もちろん、あなたのウサギが他の種類の癌にかかる可能性もありますが、治療法は常に進歩していますので、常に獣医のアドバイスを受けてください。

三鷹獣医科グループ・新座獣医科グループ 代表

日本動物病院福祉協会認定の内科認定医

特定非営利活動法人、小動物疾患研究所 理事長

小宮山典寛